

# 育心

豊かな土壌（家庭）とたゆまない環境（地域・園）づくりが健やかな心を育みます

発行責任者：秦野市教育研究所長 佐藤 直樹

発行日：平成29年5月9日

《秦野市教育研究所》

住所：秦野市桜町1-3-2

電話：0463-86-9102

平成29年度がスタートしてから、1か月が過ぎようとしています。各校の教育活動も順調なスタートをきり、ほっと一息をついているころではないでしょうか。このところ教職員の多忙化が大きくクローズアップされ、改めて業務改革の必要性が叫ばれております。実際、教材研究の時間もなかなか持てないのが現実だと思いますが、この「育心」を手にとりて教師としての自分を振り返る「ひととき」としていただくとありがたいです。

わたしたち教育研究所のメンバーは、異動がなかったので、自己紹介も兼ねて今年度の教育研究の事業内容をお知らせいたします。

教育研究所長 佐藤 直樹

## 「秦野の野鳥」から「秦野ふるさとめぐり」まで秦野ならではの刊行物

教育研究所では、子どもたちや先生方に学習活動などで活用していただくために、様々な教科や分野で刊行物を発行しています。刊行物は、先生方にも研究部員として編集にあたっていただき、その成果をまとめ、さらに一般に販売しているものもあります。

その中でも、平成28年に刊行した「秦野の野鳥 新訂版」は、平成元年に刊行された「秦野の野鳥」の改訂版を礎とし、「はだの野鳥の会」の編集・執筆により生まれ変わりました。質の高い写真や、分かりやすい探鳥コース図などの評判が良く、刊行から1年経たずに販売用の1000冊をほぼ売り切り、この度増刷されました。バードウォッチングやハイキングなど、健康志向も重なり、秦野駅だけでなく他の市内3駅には、多くの若者やシニアが週末賑わわせており、この冊子を手にとっていただいているのかもしれませんが。中には「よくできているので、自分の分だけでなく、差し上げようと思って。」と、教育研究所で複数冊、購入された方もいます。

今回は、秦野駅で秦野名産センターの特産品を販売している「名産のれん会」にお願いしたり、市内の一般の書店にも置いたり、シティーセールスの観点で販路を広げ、多くの方々に手にとっていただきました。

一方、ふるさとめぐりの手引書として昭和61年度に発行された『ふるさと秦野めぐり』も再検証され、平成15年度には「秦野ふるさとめぐり」を刊行しました。平成19年には改訂を行い、市民の方々にもたいへん好評で、歴史探訪のガイドブックとしても親しまれてきました。その後は、研究員の皆様の力を借りて、平成26年度から時間をかけ、掲載された写真の入れ替え、解説等の加筆変更等を行い、平成29年3月に再度改訂されました。現在、刊行物の販売価格を決める審査会で検討中となっていて、児童・生徒だけでなく、教職員や市民の方々が郷土を知る手助けとなれば有難いと考えております。両刊行物に共通することは、「秦野ならではの」ということではないでしょうか。「ここでよく見ることが出来る鳥」や「今まで知らなかった文化財」など、秦野を知るためには使い勝手の良い教材です。各学校の図書室にも配架されますので、ぜひ手にとっていただいて、ご感想をお聞かせください。

（関野指導主事：総括、初任者研修担当）



## ～小学校外国語活動の今後～

中学校で初めてアルファベットを学んだごく普通の中学生だった私が、中学校教員を経て秦野の外国語活動を担うことになったのは、恐らくあることが潜在意識にあったからだと思います。それは、まだ幼稚園に通っていたころ。恰幅のいい初老の外国人が現れては、ページ一杯に描かれたお馴染みの料理や調味料の絵について、園児にひたすら英語で言わせるという授業でした。最近その過去と今の自分に何かしら関連するものがあると妙な感じを抱くようになりましたが、当時は全く理解していませんでした。

さて、前置きが長くなりましたが、現在それぞれの学校で長く実施している外国語に関わる各種事業は、今回の小学校「英語」教科化に際して他市町から注目を浴びています。上智大学短期大学の学生によるイングリッシュ・フレンド、東海大学留学生によるインターナショナル・フェスティバル、ロールプレイ授業ではボランティアの協力を仰ぎ、英語を通して人と交流できる喜びを、教室に閉じこもりがちな中学生に提供している実績があります。また、私がこれまで見学した秦野の小学校の先生方の授業についても、試行錯誤とはいえ、どの教室も活気に溢れ、引き込まれるものばかりでした。これら既存の資源に更なる磨きをかけ、先生方の個性を生かした授業づくりの支援を目的として、教育委員会では新しい試みに着手します。その一つ、「小中一貫外国語教育推進研究部会」は、生きた英語を、児童生徒を第一として、先生方の悩みを解消する手立てを模索し、先生方の斬新な発想を具現化していきたいと考えております。楽しさのうちにインプットされた英語のリズムは、柔軟な子どもたちの脳に潜在し、予測不能でも何より平和で明るい未来を生き抜く力の源になることを信じて、共に取り組んでいきましょう。

(安藤美千代指導主事：外国語活動、国際理解教育担当)



平成28年度バサデナ派遣研修

## ICT活用推進に向けて

『電話は嫌い、非通知出ない 人事も驚くイマドキの就活生』(NIKKEI STYLE) 最近、ネットニュースのこんな記事が気になりました。記事によると、友人とのコミュニケーションに使うツールで電話は1.3% (18年卒就活生対象マイナビ「ライフスタイル調査」) であり、「通信手段の変化が、就活に思わぬハードルを与えることもあるようだ」というのです。コミュニケーションを豊かにするはずの情報通信技術がこのような弊害をもたらすこともある… ICTが与える影響の大きさとともに、「使い方」が重要であることを象徴的に示す事象として、少し気にとめておきたいと感じました。

さて、先生方は「授業でのICT活用」と聞いてどんなイメージをされるでしょうか。画像や映像によって「効果的」「効率的」に子どもの学習への意欲を高め、理解を深める。そんな場面でICTは大きな力を発揮します。さらに求めていきたい子どもの姿は、ICTを使ったからこそ思考が深まり、そしてそれを「伝えたい」と願う姿です。先に述べた消極的なコミュニケーションの在り様とは真逆の姿であると思っています。ICTは「使い方」によって、今後の学校教育が目指すべき「主体的・対話的で深い学び」に直結するツールであると確信しています。

平成28年度、教育委員会では、上小学校を「特色ある学校づくり」の研究校に指定するとともにタブレット端末40台を配置し、授業でのICT活用を推進していただきました。主な使用ツールは「ドリルアプリ」と「授業支援アプリ」です。端末の導入から3月までの実質半年の活用でしたが、「こんなに早く活用が軌道に乗るのは珍しい」という外部からの評価もありました。一般的に、「機器を導入したはいいけどなかなか使われないんだよね…」と耳にすることが多いだけに、たいへん喜ばしいことです。学校全体で組織的に取り組んでいただいた成果であると感じております。引き続き研究を進めていただいております。12月8日には研究報告会が予定されていますので、ぜひご参加ください。また、教育委員会では今年度、全小学校に上小学校同様のタブレット端末を導入する予定です。教育研究所では、平成28年度に「学校ICT推進研究部会」で「タブレット活用例集」を作成し、さらに今年度は「ICT授業活用研究部会」を立ち上げ、「思考力」を育むためのICT活用等について研究を進める予定です。

「ICT」は特別なツールではなく、授業の当たり前のツールであるべきだという考え方もあります。使うことでその効果を実感し、次も使ってみようと思う、その繰り返しが「日常の授業」での当たり前の利用につながっていくことを切に願っています。

(市川指導主事：ICT活用、経験者研修担当)